



環境科学部 創設20周年

地域の先に 世界がある

20年の蓄積の中で
世界を見据えた展開が実現

Faculty
of
Environmental
Science

1997—2017

長崎大学環境科学部は一九九七年に創立し、今年で二十周年を迎えます。そこで、環境科学部の成り立ちと特徴、そして未来について語り合う座談会を開きました。お集まりいただいたのは、環境科学部の卒業生である、長崎大学原爆後障害医療研究所助教の中沢由華さん（二期生）、長崎県自然環境課にお勤めの出口りえさん（二期生）、現在四年生の岡野孝哉さんと有田百合絵さん、山下樹三裕学部長です。

さらに成熟する 「文理融合」

真価は多岐にわたり 生かされる

日本においては現在もおお、環境汚染や、天然資源の枯渇、地方の過疎化などが深刻化しています。そのような中で本学部は、「自然と人間の調和を踏まえた自然環境の保全と持続可能な人間社会の実現に役立つ人材の育成」を教育理念に掲げ、現在に至ります。

—— 国立大学としては初めての「文理融合」をうたう学部として発足しましたね。

—— 山下学部長、そもそも環境科学部が誕生した背景はどのようなものでしたのでしょうか。

学部長／環境科学部が誕生した一九九七年当時、地球温暖化や絶滅危惧種が問題視されるなど、世界規模で環境意識が高まりました。

学部長／環境問題は社会のあらゆる分野に関わっており、その問題解決のためには複眼的な視座が必要です。例えば、ある化学物質の汚染に関して、まず実態を明らかにするための調査では自然科学系の学問や手法が用いられます。次にその因子を取り除いて改善を促すには、当事者や周囲の住民の理解、場合によっては政策や法の整備が必要とされ、社会科学系の手法が用いられます。そこで本学部でも、文系の社会科学と理系の自然科学の双方の知識を広く吸収してもらうために、それぞれの教員をほぼ均等に配置しています。

出口／私は二期生として環境科学部を卒業し、長崎県庁に勤めています。二年前まで在籍していた保健所では水質汚濁防止法の担当で、事業場や工場、畜産農家などの排水を調査していました。基準値を超えると当事者に排水処理について指導する場面もあり、説得するためのコミニ



島原半島ジオパーク巡検

環境科学部が例年実施している「フィールドスクール」では、地域が抱える環境問題と、それを克服・解決するための実践活動が紹介され、学生が現地にて体験することができます。

ニケーション能力も必要になってきます。まさに学部長がおっしゃった本学部の文理融合教育が実践で役立っています。今は自然環境課でジオパークの活用に取り組んでいます。地質や地層の知識はもちろん、それをどのようにツーリズム等の活用に生かしていくかが課題です。大学でエコツーリズムや地質と火山を専門とする先生の下で学んだ経験が生きています。

—— 実社会での経験に裏打ちされたお話は説得力がありますね。

学部長／本学部では特に低学年のうちに幅広い知識や技術に触れながら自身のテーマを見つけていくカリキュラムを組んでいます。高校生のうちは、自分が何に興味を持っているかや将来像についてあいまいなもの無理はありません。そこで、まずは広く浅く、さまざまな学問を俯瞰的に学んでいく中で、だんだんとテーマを絞り込んでいく流れとなっています。場合によっては二年次以降、文系から理系へ、また理系から文系へとシフトすることも可能です。

有田／そういえば私の友人たちは、みんな入学当初は自分のやりたいことを見つけられずにはいましたが、さまざまな知識を学んでいくうちに、「私は教育に携わることが好き」「法律に興味がある」といったテーマを見つけて、それぞれの先生のゼミに入って専門性を深めていきました。私はまちづくりに興味があるのですが、みんなで集まって話をしていくと異分野の話が刺激的で視野も広がります。

岡野／僕も最初、大学で何を学ぶべきかほんやりしていた時期もありました。そんな時に大学で諫早湾の干拓問題を知り、現在では卒業論文のテーマに調整池の水質調査を選んでいます。実は小学校から高校まで諫早に住んでおり、物心がついた時には諫早湾は閉め切られていました。



自分の興味のある
テーマを、
ここでじっくり
見つけてほしい
山下樹三裕 学部長